

痴呆と徘徊

Wandering in dementia

(独法) 下総精神医療センター臨床研究部

堀 宏治*

はじめに

徘徊はその研究の初期(1980年代前半)には歩行の過剰状態とされてきた。しかし、その後、外出行為、迷子など歩行の過剰状態を呈する症例が併せ持つさまざまな特性や性質などが徘徊の定義・規定に包括されたことにより、かえってその定義が不明確となり、研究が滞る一因となった。このような現状から、1990年代後半になり、徘徊を歩行の過剰状態と規定し、例えば、一日覚醒時間のうち歩行時間の割合が一定以上(30%以上)の場合を徘徊とするなどその定義を定量的に規定することが推奨されてきている。

定量化の観点から見た徘徊の定義と分類

筆者らはこのような状況を踏まえ、徘徊の定義を歩行の過剰状態と規定し、国立下総療養所(当時)・痴呆病棟に入院したアルツハイマー型痴呆(ATD)ないし脳血管性痴呆患者(VD)107例の一日の歩行量を定量化することで徘徊を定量的に客観的に定義し、あわせて痴呆の行動心理学的症候(BPSD)を問題行動評価票(TBS)により数量化することで徘徊の下位分類を同じく客観的に規定しておこなった^{1), 2)}。

1. 徘徊群と非徘徊群を分ける歩行数の決定

図1に設定歩行数のsensitivity(設定歩行数を越える者/TBSの「徘徊」項目得点が3~4の高頻度徘徊者)およびspecificity(設定歩行数を下回る者/TBSの「徘徊」項目得点が0~2の者を低頻

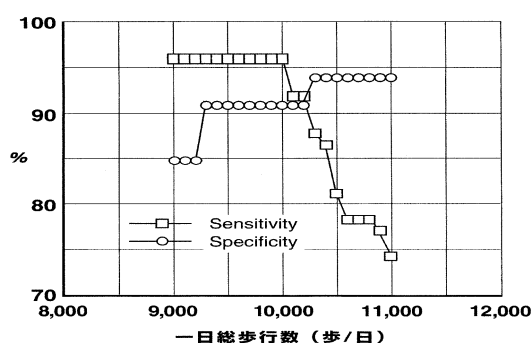


図1 一日総歩行数を指標とした徘徊行動のsensitivity (□: 設定歩行数を越える者/高頻度徘徊者)とspecificity (○: 設定歩行数を下回る者/低頻度徘徊者)

度徘徊者)を示した。図1より一日総歩行数が9,300~10,000歩ではsensitivity, specificityとも90%以上となるため、10,000歩を徘徊者と非徘徊群を分ける歩行数とした。

2. 徘徊群(行動症候群)の分類

表1に痴呆群107例の「徘徊」項目を除いたTBSの因子分析の結果を示した。表1より、第1因子は「誣告」「否定・曲解」「団欒妨害」「トラブル」「暴言・暴力」「まつわり」「叫び」であり、主に第三者への攻撃性を示す行動であった。第2因子は「仮性作業」「収集」「放尿・弄便」であり、自己で没頭する行動である。徘徊行動は主にこの2群に分類された。このことより、徘徊行動は第三者への攻撃行動を示す群と自己で没頭する行動を示す群とに分類された。さらに、第1因子、

* Koji Hori: National Shimofusa Hospital, Department of Clinical Research
現) 昭和大学横浜北部病院 メンタルケアセンター
Showa University Northern Yokohama Hospital, Department of Psychiatry

表 1

TBS 項目	第 1 因子 (46.10%)	第 2 因子 (18.20%)	第 3 因子 (7.40%)	第 4 因子 (5.90%)	第 5 因子 (5.20%)
誣告	0.891				
否定・曲解	0.827				
団欒妨害	0.571				
トラブル	0.788				
暴言・暴力	0.886				
まつわり	0.675				
叫び	0.881				
徘徊		—			
仮性作業		0.509			
収集		0.925			
放尿・弄便		0.897			
夜の騒ぎ			0.884		
異食				0.865	
隠匿					0.469

第 2 因子それぞれの因子を構成する行動症候の合計得点は一日総歩行数と有意な正の相関を示し、なかでも、第 2 因子を構成する各行動症候は一日総歩行数との相関が有意であった (表2)。このことから、第三者への攻撃行動群は広義の徘徊に相当し (興奮型群)、自己没頭行動群は狭義の徘徊に相当する (典型的徘徊群) もと判断した。

3. 各徘徊群の特徴

痴呆の疾患別、重症度別にみると、広義の徘徊群は中等度の VD に多く、狭義の徘徊群は重度の ATD に多い。また、軽度の AD の段階で「徘徊」、

「仮性作業」得点のみが高い (典型的徘徊群の) 原型の徘徊群と言うべき下位群の存在が示された。認知機能の関連から見ると、原型の徘徊群は長谷川式痴呆スケールの流暢性課題が有意に障害されており、前頭葉の機能低下が示唆された。また、狭義の典型徘徊群は空間認知など頭頂葉の機能低下が示唆された。広義の徘徊群は簡易テスト上低下している認知機能は認められず、うつ状態などの機能的障害や環境因子との関連性が示唆された。

おわりに

徘徊行動を歩数計および行動評価尺度を用いて、定量的に定義した筆者の報告を紹介した。また、徘徊をこのように考えると、過去の定性的定義に基づく徘徊行動の特徴と一致するところが多く、徘徊を定量的に定義する有用性が示唆された。

参考文献

- 1) 堀 宏治：入院痴呆患者における徘徊の分類と認知機能との関係：徘徊行動の定量化の観点から。慶應医学, 77 : 171-183, 2000.
- 2) Hori K, Inada T, Tominaga I, et al: Pacing rhythms of "wanderers" with dementia. Psychogeriatrics, 1: 76-81, 2001.

この論文は、平成16年7月24日(土) 第18回老年期痴呆研究会 (中央) で発表された内容です。

表 2

TBS 項目	相関
誣告	np
否定・曲解	np
団欒妨害	np
トラブル	np
暴言・暴力	np
まつわり	np
叫び	np
第一因子の合計得点	p<0.05
徘徊	p<0.01
仮性作業	p<0.01
収集	p<0.05
放尿・弄便	p<0.01
第二因子の合計得点	p<0.01
夜の騒ぎ	np
異食	np
隠匿	np